

警官好き



エド・マクベインの小説に「警官嫌い」というタイトルのミニステリがあるが、わたしはそのタイトルとは逆に「警官好き」である。もちろん、実生活で警察官の世話になるのは御免だし、被疑者として警察官と付き合いたくはないが、見たり聞いたりするぶんにはわたしは警察官に大いに関心がある。なぜわたしが警察官に興味があるのかは不思議と言えば不思議なのだが、少年の頃、警察官は「正義の体現者」という風に映るからだと思う。少年の前に「仮面ライダー」や「ウルトラマン」の次に現れる正義の使者としての警察官。悪を懲らしめ善を実現する正義のヒーロー。パトカーの赤いパトライトが明滅する犯罪現場。「KEEP OUT」と書かれた黄色いテープを無造作に掻い潜り登場するコート姿の捜査官。男子なら一生に一度は体験したい場面ではないか！

世に数々の職業はあれど、これほど格好いい登場を用意できる職業はざらにない。

もちろん、現実の刑事は格好いいだけの仕事ではなく、悲惨な現実を目の当たりにする厳しい仕事であることは十分に想像できるが、やはり死ぬか生きるかの人間の究極の姿を描くには警察官はもってこいの職業なのだと思う。戦争をしていない世界において、最も死の近くにいる職業が警察官の世界であると思う。(わたしの処女作「ある日、ぼくらは夢の中で出会った」は、刑事が主人公の芝居だった) そんな「警官好き」のわたしが、今年の三月に上演する『私に会いに来て』は、韓国映画『殺人の追憶』の原作になった韓国の現代劇で、主人公は一人の殺人犯に翻弄される四人の刑事たちである。

高橋いさを

〈劇団シヨーマ主宰 劇作・演出家〉